

リレーエッセイ・
海外派遣
専門家たより

初めての楽器で 開いた演奏会

ザンビアで管楽器を教える

おかべ
岡部マリー・ロレンツ
フルート奏者

50年代から60年代初頭にかけて英国自治植民地南ローデシア（現ジンバブエ共和国）で育った私にとって、この旅は大変意味のあるものでした。

私がルサカに着いたのが高く、乾燥している10月でしたが、かわいらしい花をつけたジャカランダの木や、目の覚めるような紫や赤い花が並木にまだ残り、街を鮮やかに彩っていました。時おり吹く風で乾燥した赤い埃が舞い上がり、街は隅々まで埃だらけになっていました。

エブリンフォン・カレッジの職員や学生たちとは、毎朝温かい笑顔と握手、そして親指の握手（指相撲のように互いの親指を押し合う）で挨拶を交わし、すぐに打ち解けることができました。教師の皆さんにフルートの吹き方を教える私のクラスの日程はすぐに決まり、各教師が週に2回ずつ指導を受けることになりました。

ほとんどの教師はフルートを

吹くことは未経験でしたが、姿勢や呼吸などの練習を重ね、クラスで基礎を教えていくうちに徐々に吹けるようになっていきました。出せなかった音を出せるようになったときの喜びの声を聞くのは何よりの楽しみでした。「天国にいるような気分」と言った人さえいたのですから。

フルートを熱心に学ぶ彼らの姿には驚かされたものです。また、「本来持っている芸術的センスを引き出すには、フルートについてどのようなイメージを思い浮かべればよいのか」といった大変おもしろい質問も授業中に出ました。ちなみに、この質問には、私は「人間の声」と答えましたが。

3週間たつて、日本から村上準一郎さん（トロンボーン奏者）と橋爪恵一さん（クラリネット奏者）の2名の派遣専門家が合流しました。それからの2週間は、さらに充実した日々となりました。午前到我々3名でさまざまな管楽器やリード管楽器の指導を

エブリンフォン・カレッジはザンビア独立前の設立。北ローデシア最後の総督エブリン・フォン脚の名前が冠されている。その後、音楽学科や美術学科を含む教育学部などが増設された 写真提供：筆者（以下も同じ）



教師に対して行ない、午後は引き続き卒業式でのコンサートに向けて学生の指導をしました。

一部の楽器については演奏経験のない学生もいました。ところが、その習得の速いこと！とはいえ、音調の理解には多少時間がかかりました。というのは、文化的に彼らの音階は西洋の平均律とは異なり、どちらかといえば自然音階に近いのです。しかし、奏でられる音はともきれいなハーモニーを生んでいました。

大学の学習環境は劣悪でした。特に

2005年10月から12月にかけて、私は、ジャパンファウンデーションの派遣により、ザンビア共和国の首都ルサカにあるエブリンフォン・カレッジに、日本政府の文化無償協力で購入された管楽器の教授法を教師の皆さんに指導しに出かけました。19



おかべマリー・ロレンツ
 ●コペンハーゲン生まれ。幼少期の大半をジンバブエ（旧南ローデシア）で過ごす。デンマーク王立音楽院卒業。1968年に来日し、東京芸術大学でフルート、尺八を学ぶ。78年より独奏会、室内楽コンサート、オーケストラとのソロ共演、テレビラジオの収録などで活躍中。92年にはデンマークと日本の文化交流への貢献によりフリスホルム賞を受賞



卒業式での演奏に備えて、午後は学生の吹奏楽団を指導。テンポの速いザンビア国歌を完璧に演奏することが課題だった

資金不足のため建物の状態は悲惨ともいえるものでしたが、11月18日に大学の講堂で開かれた卒業式でのコンサートは大成功でした。学生の吹奏楽団は2週間の特訓で上達し、活き活きと演奏していました。観客もとても熱心に聴いてくれました。

私の教え子も魅力的なフルート二重奏を演奏しました。「赤とんぼ」の素晴らしい合唱もありました。この「赤とんぼ」はたった1週間で習得したものです。彼らの持つ生まれた声は素晴らしいものでした。

観客の学生が特に感動し喜んだのは、ザンビアの太鼓と日本のトロンボーン奏者の共演によるジャズで、まさに文化交流といえるものとなりました。また、複雑なリズムのザンビアの太鼓に合わせたパロツェランド（東部州）の有名なシヤンボカ・ダンスも披露されました。このダンスの練習に私も参加しましたが、とても自然な動きで、あらゆる音楽家にとって素晴らしいセラピーになると思えました。



クリスマスコンサートでは、感動的な「アヴェマリア」のほか、フルートとギターの伴奏によるソプラノなども披露された。吹奏楽団によるバッハの聖歌も成功。フルートとユーフォニウム、トランペット、チューバ等の演奏は目を見張るものだった

卒業

式のコンサートのあと、日本人の

お2人が帰国され、私は引き続き残って指導を続けました。学生たちは、授業が終わった午後、毎日行なう楽器練習により熱を入れるようになりました。この意欲を将来につなげていくには、

定期的に専門家を派遣することが必要でしょう。

今度は、クリスマスコンサートに向けて吹奏楽団によるバッハの聖歌の練習に入りましたが、大学は年末試験のために徐々に忙しくなってきました。試験、特にザンビアの太鼓とダンスの試験は興味深いものがありました。この大学は、西洋音楽とは別に、国家のアイデンティティにとって重要な独自の文化を伝えようと努めており、その努力に胸を打たれました。

試験が終わったあとの12月22日、ルサカで最大の教会であるアングリア大聖堂でクリスマスコンサートが開催されました。コンサートの最後には、教会の入口の前で太鼓に合わせたザンビアのダンスが披露されました。全体として、ザンビアの新しい音楽活動に多大な貢献ができたと思います。ザンビアの若者の将来にとって価値のある、こうした音楽教育活動が続いていくことを望んでいます。

（原文は英語）